ぼくは利根川の水の輪「ポトム」。利根川の源流でポトンと落ちた1滴の水から生まれたんだ。ぼくといっしょに、川と水のことを学んでみよう。

●もくじ

P1　川にまつわる話
P2-3　群馬の親水公園・親水施設
P4-5　春の「かわら」は、みんなのひろば!
P6-7　群馬のダム特集
P8　ポトムの楽校

川の子ども新聞

2003 春号

上毛新聞

川に、春がやってきた。

風はほんのりあたたかく
水はやさしくぬるむころ。
さあ、みんなでかわらに出て、
春のいぶきを感じてみよう。

三波石峡(鬼石町・神流川)

川にまつわる話

――板橋　春夫

◆上野村乙父のおひながゆ

多野郡上野村乙父のおひながゆは、毎年四月三日に神流川の河原で行われます。何日も前から大人たちがコの字形に石垣を築いて準備。この石垣は地元では「オシロ」と呼ばれています。オシロは「お城」ではなく、「お社」「苗代」の「しろ」で、聖なる場所を表す言葉なのです。

当日、子どもたちは朝早くオシロに集まり、おかゆを食べた後、トランプなどの遊びで楽しく過ごします。オシロの中におひなさまを飾りますが、オシロの入り口すべてが、神流川の対岸にある天神様が祭られる小山に向いています。

◆富岡市高瀬のマガゴト流し

七月二十四日、高瀬神社へ氏子総代と神社世話人、参拝当番が集まり、境内に生えているシデの枝を切り、これで茅の輪と枝舟を作ります。また、社前には槍と長刀を用意。これは模造品で、男の子が生まれた家では槍、女の子が生まれた家では長刀を奉納する習わしでした。

午後、神主が枝舟に乗ったわら人形に半紙を着せ、頭には半紙とアオイの葉をのせます。こうするといかにも人形らしくなります。

いよいよ境内で茅の輪くぐりです。手に持ったチガヤを丸めてその輪の中に息を吹きかけるのですが、こうすると一年間の罪や汚れが取れるといいいます。茅の輪くぐりが済むと、人々は鏑川に向かい、河原で枝舟と茅の輪を流します。人々の汚れが川に流されていくのです。

◆玉村町五料の水神祭り

佐波郡玉村町五料の水神祭りは、本来は大杉神社の祭りで、昔は船頭の行事でした。「利根川がある限り、食いっぱぐれはない」と言われるほど、多くの家が利根川の水運で生計を立てていました。

かつての舟は長さ六、幅二の大きなもので、鎧、舵は麦わらで本物に似せて作るなど、明治末年まで使われた船を模したものです。

七月二十五日、麦わら舟は飯玉神社を出て町内を巡回。現在は子ども会の行事で、子どもたちがリヤカーにのせて運びます。そして沿道の人が水をかけたりします。夕方になると、五料橋の下で麦わら舟を流します。ちょうちんの明かりが幻想的な美しさをかもし出します。

昔は、この麦わら舟が流れ着いた所は毎年決まって水害があると言われていました。そのために船頭たちは麦わら舟がつかえているのを見かけると必ず押し流したものだそうです。

□参考文献…『祭礼行事・群馬県』(おうふう・一九九六年)
板橋春夫(いたばし・はるお)
一九五四年生まれ。群馬歴史民俗研究会代表。近著に『葬儀と墓の現在―民俗の変容』(共著・吉川弘文館、二〇〇二年)、『暮らしの中の民俗学』第一巻(共著・吉川弘文館、二〇〇三年)がある。